

甲南国文 第34号 P11の表Ⅱ・Ⅲ訂正

[表Ⅱ]

	「後百番」の組み合わせ		番数	「風葉」入集歌との重複	
	左	右		左	右
1	源氏	夜寝覚	20	6	9
2	〃	御津浜松	15	6	11
3	〃	参河爾佐介留	15	5	9
4	〃	朝 倉	13	3	6
5	〃	左毛右毛袖湿	10	6	5
6	〃	心高幾	10	6	5
7	〃	取替波也	6	2	4
8	〃	露之宿	5	1	2
9	〃	末葉露	3	1	2
10	〃	海人荻藻	3	0	2
計			100	36	55

[表Ⅲ]

「百番歌合」の組み合わせ		番数	「風葉」入集歌との重複	
左	右		左	右
源氏	狭衣	100	48	39

「源氏」「とりかへばや」の番いについて

〈続〉

―「物語後百番歌合」の配列から―

大槻 修

五

八十八番の番い。

左 須磨の浦に思し立ちしころ、致仕の大臣に渡り給ひて、大宮に聞こえさせ給ひける

鳥部山燃えし煙もまがふやとあまの塩やく浦見にぞゆく

右 四の君、今大臣に渡りてのち、内の大臣思しなげきてかきこもり給へるころ、太政大臣に渡りて、日ごろ帰り給はぬに、内の大臣、「君恋ふときえみきえずみゆきかへり越えぞわづらふ死出の山道」と侍りける返し

内大臣上

鳥部山燃えし煙はそれかともわれをばたれか今はたづねむ

左は、須磨の巻から源氏の歌。須磨にくだる源氏は出発前に左大臣邸を訪ね、一夜を語り明かす〔②〕六。大宮から、せめて夕霧の起きるのを、と消息があるものの、気強く立ち去ろうとする〔八〕条。大宮からの返歌に「なき人の別れやいとど隔たらむ煙となりし雲井ならでは」とある。折から「入方の月いと明きに、いとどなまめかしう清らにて、物を思ひたるさま、虎狼だに泣きぬべ」き風情であつた。

右の歌を含んだあたり、古本の筋立は複雑を極めているようだ。本稿の趣旨が古本「とりかへばや」の復元にあるわけではないが、一応、小木氏の推測を記しておこう。

もとの女中納言、今の尚侍が、宰相と結婚して、正妻にお

さまつてしまふ。そして、おそらく宰相は女君の前歴を知つたことであろうが、その方を重んずるようになる(中略)。こうして四君は、もとの夫(別人ではあるが世間的には、もとの夫の所へ返ることもできない、また宰相との間にも正妻が坐りこんでしまふという、身の置き所の無い状況に落ち入つてしまつたのである。そのため彼女は、父関白の家に籠つてしまつたのであろう。それを嘆いた宰相が、かきこもつてしまつて、ろくに自分のところへ顔を出さないものだから、こんどは女主人公が腹をたてて、これも親の家へ行つてしまつて、なかなか帰つて来ない。そこで内大臣が歌を送つた、という次第であらう。

つまり、「今大臣」を「今関白」に、「大政大臣」を女君の父と考ふるわけである。その復元考証は詳細を極めているが、まず大筋に誤ちはなからう。

さて八十七番との関連を調べてみる。八十七番左は、前述の通り亡き大君を偲ぶ心に裏打ちされた薫の詠であり、片や亡き葵の上を偲む源氏の詠(八十八・左)と、共通して故人を想う情に満たされている。また、ともに贈答歌の形式(八十七・左は辨の尼↓薫。八十八・左は源氏↓大宮)を取っている。よつて八十七番左↓八十八番左と考へておきたい。ついで、八十七番左と

八十八番右との、また八十七番右と八十八番左との関連をみるに、然るべき照応はない。八十七番右と八十八番右との照応を考ふるに、女中納言に久しく逢うを得ぬ内大臣のいらだち(八十七・右)に対して、「日ごろ帰り給はぬ」女君(もと女中納言)にオーバーな訴えの歌をよこす内大臣の前に、なおご立腹らしい彼女の詠(八十八・右)と、その心情は共通している。

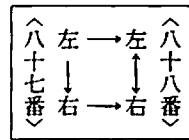
一、ともに内大臣・女君の贈答歌の形式を取っている(八十七・右は「風葉集」入集歌をも参照)。

一、共通して詞書に「こもり居て」(八十七)「かきこもり」(八十八)の語句を持つ。

など、八十七番右↓八十八番右と考へて間違ひなからう。最後に八十八番の番いは、一見して、「鳥部山燃えし煙」という全く同一の語句を有し、かつ「―もまがふやと」(左)「―はそれかと」(右)と、続き具合すら共通性を帯びている。

思うに八十八番右の歌は、左の歌を引歌に踏まえているのではなからうか。大宮の消息に対して源氏の返し、「墓上を火葬した時、鳥部山に立ち昇つたと同じ煙も見られようかと、私は海人が塩を焼く須磨の浦に行きます」(古典全書本の訳)との詠は、亡き葵の上への哀惜の情に溢れている。それを踏まれて「とりかへばや」の女君は、「あの光源氏は、いつまでも亡き葵の上

の火葬の煙を忘れずにいるものを、もし私が死んでも、あの煙がその火葬の煙だと、誰ひとり訪ねてくれる人は居らないこと」と嘆いてみせた。まさに本歌取りと考えられ、当然ながら



八十八番左↓右の線は動かぬところであろう。なお両首とも、物語本文の上では贈答歌の形式を取っている。以上の諸点を総合して図式化すると、上掲のような照応関係を認め得るのではなからうか。

六

「源氏」とりかへばや」番いの最後、八十九番について調べる。

左 弘徽殿の細殿にて宿直申しの声聞こえけるに

三条の尚侍内侍

心からかたがた袖をぬらすかなあくと教ふる声につけても
右 世を恨みて、近江の浮橋といふ所にこもりなむとて

右大臣四の君

あさぼらけ夕つげ鳥ももるともなく越ゆる逢坂の関
左は賢木の巻から臘月夜の尚侍の歌。六条御息所の伊勢下向、

桐壺院の崩御、四十九日も過ぎて藤壺は三条の宮に退出―と、源氏にとつて悲運は重なり、権勢は右大臣に帰してしまふ②「二三」。失意の源氏は忍んで尚侍に逢うが、翌朝帰ろうとして藤少将に発見される「二四」条である。やはり贈答歌の形をとり、源氏の返しは「歎きつつわが世はかくて過せとやむねのあくべき時ぞともなく」。時刻は「程なく明けゆくにやと覚ゆるに」夢深き暁月夜のえもいはず霧り渡れる」頃合であつた。

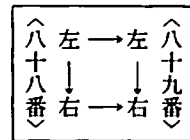
右は数奇な運命にもてあそばされた四の君の歌である。女中納言と結婚し、また宰相とも結ばれたものの、女中納言の後身である尚侍に正妻の座を奪われ、かつ、もとの中納言妻に戻ることできない―と、小木氏も説かれるように、まこと哀れな女性である。近江の浮橋が何処か不明だが、地名には違ひなからう。ともあれ父の家さえも安住の地ではなく、近江に籠つてしまつたのであろう。その後の彼女の去就は分からない。なお「風葉和歌集」巻八、結旅に詞書「逢坂を越ゆとてよめる」とりかへばやの新中納言」として入集、第二・三句が「夕つげ鳥」ともろごゑに」とある。「新中納言」と記された理由は不明で、「風葉集」の誤記とも考えられる。

八十八番との関連を追うに、須磨下向で大宮と別れを告げる源氏は、「暁の別れは、かうのみや心づくしなる」と歎き（八十

八・左、源氏と別れる鹽月夜の尚待また「程なく明けゆく」「夢深き暁月夜」の霧渡れる頃合であった(八十九・左)。物語本文では、ともに贈答歌の体裁をとっている。ついで、須磨下向という悲劇を前にして、想い出されるのは鹽月夜の君との恋のアンチユールであった。八十八番左↓八十九番左と推測し得よう。八十八番右と八十九番右とは、ともに詞書に「かきこもり給へる」(八十八)、「こもりなむ」(八十九)とあり、詠み人こそ異なれ、「世を恨」む心情であろう。また内大臣の歌に「越えぞわづらふ死出の山道」(八十八)と記され、四の君また「なくなく越ゆる逢坂の関」(八十九)と、類似した発想がうかがえる。八十八番右↓八十九番右とも考え得よう。また八十九番の番いは、時間的に「宿直申しの声聞こえける」(左)、「あさぼらけ」(右)と共通し、歌そのものにも「袖をぬらすかな」(左)「なくなく越ゆる」『風葉集』の場合は「もろこえになくなく」(右)と類似した表現がみられる。また「あく(鮎く)」(左)に対する「近江のうき(憂き)橋」(右)も照応していよう。八十九番左↓右と関連づけて誤りはなからう。

以上の諸点を図にすると下掲のような対応を見出し得るのではなからうか。

以上をもつて、「源氏」「とりかへばや」計六番の番いを点検



してきた。非常に密接な照応関係を示す場合もあれば、相互にやや希薄な関連性を認めざるを得ぬケースも見られたようである。なお、ここで改めて「源氏」「心高」計十番の番いの結番である。「後百番歌合」八十番から、「源氏」「とりかへばや」冒頭の番いである八十四番への影響関係ならびに、「源氏」「とりかへばや」結番である八十九番から、「源氏」「露之宿」計五番の初めに位する九十番への照応も点検しておく必要があろう。

七

「源氏」「心高」結番の八十三番はつぎの通りである。

左 一条の御息所かくれてのち、右の大^{おと}臣^{もの}も思^{おも}し乱^{みだ}るるさまにも見^みえければ 右大臣の上

あはれをいかに知りてかなぐさめむあるや恋^{こひ}しきなきや 悲^{かな}しき

右 冷泉院かくれさせ給^{たま}ひてのころ、一品の宮の御とぶらひに

春宮宜旨

なかなかにおどろかさじとおぼれど見しや夢ゆめとぞ忘れわびぬる

左は夕霧の巻から雲井の雁の歌。夕霧の無情ゆえと恨んだ落葉の宮の母御息所は、心痛のあまり病を得て急死、宮の心はなかなか夕霧に解けず、一方の雲井の雁とて心おだやかではなかつた〔⑤〕四六〕。「はかなき紙の端に」若君をして手渡した「あはれをも」の歌に対して夕霧は、「ことなしびに、いづれとかわきてながめむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を」と返す。このような経過がやがて急転回して、強いて一条邸に落葉の宮を引き取る夕霧、怒った雲井の雁が父大臣邸に帰ってしまう結果に終る。

右の歌は、冷泉院の崩御に対して内親王の一品の宮に送った宜旨の歌。春宮は内親王のご兄弟であられたか。「心高たか」物語の筋書もまた複雑だが、復元に関する小木氏の

宜旨が弔問の文を奉るといふことは、単に以前春宮に侍していた女と皇女との間柄だけでは、普通には考えられないことだから、もつと近い関係にあったと考えなければならぬまい。そうすると、「源氏」の紫上と女三宮のような関係にあった、すなわち、一品の宮も内大臣に降嫁されていたと

推測することも可能であろう。

とする指摘に注目したい。いま、八十三番の番いを分析するに、左の歌は前述した通り、夕霧を挾んで落葉の宮と雲井の雁という三角関係という場に物語が構成くわせられており、娘落葉の宮の今後に胸を痛める母御息所、日頃は謹厳な夕霧とても落葉の宮に傾斜する恋心を抑えがたい日々。こうした条件下に歌われた雲井の雁の心情であつた。右は、察するに多情な内大臣を挾んで、一品の宮と宜旨という三角関係が物語に構成されていたのであろう。その一品の宮の父帝が冷泉院であられた。「心高たか」の大筋は、

春宮と若い宜旨の恋は、春にはじまり、ついで契をかわし、秋の末九月二十余日まで続く。しかし、突然宜旨は行方不明になり、危難におちいつて生命も危うくなる。だが幸にその境界から脱して、中納言と結ばれることになる。これはおそらく翌年のことで、秋以前であらう。宜旨を失つた春宮は、帝位につかれても、女を忘れることができないう秋夜を嘆き明かすことが多い。この同じ秋のころか、あるいは何年か過ぎての秋のころかわからないが、内大臣は一条前斎院にあこがれるようになり、宜旨は物思いになやむだが、この夫婦仲はとにかく続いたと見えて、後年娘を後

冷泉院(春宮)に入内させ、その折十数年ぶりて二人は再会した。

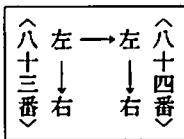
とする小木氏の復元に拠つておきたい。それにしても、「心高^幾」の場面設定は、「源氏物語」の当該場面に非常によく似ている。

やはり内大臣をめぐる一品の宮・宣旨二人の心的葛藤、また三者三様の苦悩が綿々と綴られていたのではなからうか。片や落葉の宮、片や一品の宮とする類似までもが注意される。あえて推測すれば、「心高^幾」のこうした場面設定には、「源氏物語」の当該場面が深く投影していたのではあるまいか。両首の詞書「かくれてのち」(左)「かくれさせ給ひて」(右)の類似をも含めて、当然ながら八十三番左↓右の位置づけは動くまい。なお「風葉和歌集」巻九、哀傷に、詞書「冷泉院かくれさせ給へりけるに、一品の宮に聞こえ侍りける」心高^幾後

冷泉院の宣旨」として入集されている。

八十四番との関連を見るに、夕霧を挟んで落葉の宮と雲井の雁という三角関係(八十三・左)に対して、片や浮舟を挟んで匂宮と薫という三角関係(八十四・左)を条件下とした歌どもであり、物語本文に据えてみ

ると、ともに贈答歌の形式を取っている。八十三番左↓八十四



番左と推測し得よう。八十三番左と八十四番右、また八十三番右と八十四番右との相互の関連は認められない。ここに、「源氏」^{「心高^幾」}の結番と、「源氏」^{「とりかへばや」}の最初の番いとの関連を上掲のような展開で認めておきたい。

八

「源氏」^{「露之宿」}九十番の番いはつぎの通りである。

左 六の君に兵部卿の宮通ひ初めさせ給ひける夜ふけゆ

くまでおはしまさざりければ 右大臣

大空の月だに宿るわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな

右 世をそむきてのち、権中納言のもとに

入道兵部卿親王

松垣のましばの扉ささずして明けぬ暮れぬと君をこそ待て

左は宿木の巻から夕霧の歌。夫匂宮が夕霧の六の君と結婚の由を聞き知った懷妊の身の中の君は、見舞いに訪れた薫に宇治同行を依頼する(⑥―三二)。中の君を諦め切れない薫だが、一方で夕霧は婚礼の用意を整えて、匂宮の入来を促す条(二五)である。なお「風葉集」巻十七、雑二に詞書「匂ふ兵部卿のみこ、娘に頼めて侍りけるに、十六日の月のやうやうさしあがるまで

心もとなく侍りければつかはしける 夕霧の左大臣」として入集。

右は兵部卿親王が出家ののち、権中納言に送った歌。小木氏のいわれる「権大納言・兵部卿親王・一条院の三人の交遊とそれぞれの恋愛を叙述して行って、権大納言の死、兵部卿の出家という暗い結末に至っている厭世的物語とでも言うべき」作品か。なお兵部卿親王の出家の理由は判然とせず、松尾聆氏は、

或は、北の方や御子たちを頻りに失はれでもして、物のあはれを感じられての御発心かも知れないし、或は又愛人にそむかれる運命をもたれたりしたための御厭世かも知れない。ともかく、唯煩惱の世、汚れた世をのがれて、半生を清く静かに送らうと思ひ澄まされての御出家とは想像されるやうである。

と推測される。八十九番との関連をみるに、八十九番左と九十番左との間に影響関係は考えられない。右同士を調べると、一、「世を恨みて」「う（憂）き橋」「こもりなむ」（八十九）に對して、「世をそむきて」（九十）と対応関係を見ることができ

る。一、前述のように、父郎すら安住の地となし得なかった四の君が、近江の浮橋に籠ったのちの去就は判然とし得ないが、「露

之宿」物語の兵部卿親王のように出家したのであろうか。

以上のことから、八十九番右↓九十番右の照応を認めておきたい。九十番の番いは、「露之宿」の物語展開がいま少し判然と

しないが、左右の歌に「待つ宵すぎて」（左）

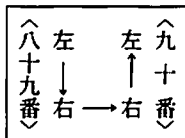
「君をこそ待て」（右）、また「宿るわが宿」

（左）「ましばの扉」（右）など類似した語句

があり、上掲のように、むしろ右↓左と導

き出されたものであろうか。一応、八十九

番との対応を以上のように考えておきたい。



結

以上、「源氏」「とりかへばや」計六番の番いについて、また「源氏」「心高幾」八十三番との対応および「源氏」「露之宿」九十番への照応などを調べてきた。まず表一について述べておきたい。「源氏」「とりかへばや」八十四番から八十九番について、左方（源氏物語）の歌は物語の巻の順に入集されていない。浮舟の巻から始まって、若紫・須磨・東屋・須磨・賢木と相前後している。ただ須磨の巻から二首取っていることは注目されよう。ともに須磨流論を前にした源氏の詠であり、また「後百

番歌合」に入集された「源氏物語」の歌を巻の別に数えらるゝ、須磨の巻から十首と第一位である（第二位は浮舟の巻から八首）。なお「源氏」「夜の寝覚」の番いでも見られたように、うち一首は「風葉集」に入っている。ついで、八十四番に触れておく。

「後百番歌合」に採用された「夜の寝覚」など十物語の、それぞれ結番における左方の歌を調べると、うち四物語（夜寝覚「御津浜松」「参河爾佐介留」「海人苺藻」）がすべて浮舟の巻から浮舟の歌を入集している。また「源氏」「参河 爾佐介留」最初の番い、三十六番左および「源氏」「取替波也」最初の番い、八十四番左が、ともに浮舟の巻から入集されている。こうして「後百番歌合」の結番つまり百番左が、締めくくりでもって浮舟の巻の末尾から浮舟の最後の歌となっている。いかに藤原定家が「源氏物語」全巻のうちで浮舟の巻に執着したか、思い半ばにすぎらるであろう。なお前述したように、八十四番左「みづまさる」の歌は、「源氏」「御津浜松」三十五番左「里の名を」の歌の詞書の中に入集されている。

ついで、右方「とりかへばや」の歌を考えてみよう。すでに小木氏が、「拾遺百番歌合」におけるこの物語歌の排列は、大体時間的順序になっているようである」と推測されているが、まず八十四番右が今本の場合でも贈答歌の最初に位し、亡き古

本のを、改作せず、そのまま取り込んだと覚しい。考えてみれば、「後百番歌合」一番右「夜の寝覚」の場合も、物語開巻筆頭の歌であり、かつ改作本「夜寝覚」も、この歌だけは改作していなかった。また「源氏」「御津浜松」番いの最初、「二十一番右」も、物語の由来を示す重要な歌を取り込んでいた。また八十五番・八十六番右に関しては、前述の通り古本・今本との間で順序が逆になっており、今本に置き直せば物語順序は八十六番・八十五番となるが、古本の場合やはり計六番番いの右は、古本の物語展開の順序になっていると思われる（八十七番から八十九番に至る右の歌の位置づけは、古本と今本との筋書が、大幅に改作されているために、今本に据え直して想定しがたい。よって表Ⅰの場合も記入していない）。

つぎに右の歌のうち四首が「風葉集」と重複している事実である。八十四番右は「風葉集」の場合も同じように、詞書の中へ贈歌を入れる、といった類似した形式を持ち、八十六番右のケースも、長文の詞書がほぼ両者同じ内容を伝え、八十七番右に至っては、「風葉集」でその返しの歌まで入集せしめている。かかる類似は八十九番右の場合も同じ。以上のことは何を意味するものであろうか。いま表Ⅱ・Ⅲを参照しながら検討してみたい。表Ⅱは「後百番歌合」計百番の番いを、それぞれ十物

〔表 I〕

後百番 歌合	八十四番		八十五番		八十六番	
	左	右	左	右	左	右
源氏 物語	a	浮舟		若紫		須磨
	b	(後百番・35・左)				(風葉・隠別・527)
	c	⑦ 58		① 302		② 129
とり かへばや	d		卷 1		卷 3	卷 3
	e		(風葉・恋1・815)			(風葉・雑2・1326)
	f		① 66		③ 75	③ 34

八十七番		八十八番		八十九番	
左	右	左	右	左	右
東屋		須磨		賢木	
(風葉・雑2・1274)					
⑥ 299		② 126		② 81	
	(風葉・恋5・1116)				(風葉・蜀旅・571)

注 (1) 上段は「後百番歌合」(拾遺百番歌合)の第八十四番から第八十九番までの、それぞれ左・右の区別を示す。

(2) 中段は、a = 「源氏物語」より取られたそれぞれの歌の所在する巻の名。b = 「風葉和歌集」に入集した場合の部立と番号(増訂校本風葉和歌集による)。c = その歌の掲載された日本古典全書本の分冊と頁(⑦58は第7分冊の58頁を示す)。※ b 項(八十四番)は例外。

(3) 下段は、d = 「今とりかへばや」に大凡推定し得るその歌の存在場所の巻。但し八十七番以降は記さず。e = その歌の掲載された「風葉和歌集」の部立と番号。f = 今本に推定し得るその歌の場面展開(学術文庫本「とりかへばや」=講談社の分冊、頁による)。なお古本・今本との関係は複雑で、大凡の推測に過ぎず、八十七番以降は記さず。

語のケースに区分し、そのうち左・右に分つて「風葉集」入集歌との重複の模様を一覧表にしたものである。さて、

一、左(源氏物語)の場合、「左毛袖湿」「心高^機」物語との番いを除いて、「風葉集」との重複のパーセンテージは至つて低い。特に「朝倉」「露之宿」番いの折など、その重複度は最低といつてよい。

一、一方、右(十物語)を見ると、「露之宿」のケースを除いて、「風葉集」入集歌との重複の度合は極めて高いものがある。特に「御津浜松」十五首のうち、実に十一首が「風葉集」入集となつており、ついで「朝倉」「取替波也」の場合など、半数以上の歌が重複している。

一、「後百番歌合」の計二百首の歌を比較すると、「源氏物語」百首のうち「風葉集」入集歌三十二首であるのに対して、十物語の計百首のうち「風葉集」と重複するもの実に半数を超える五十五首となつている(ともに、詞書の中に含まれている歌で重複するケースは含まれていない)。

一、「百番歌合」(源氏物語)と「狭衣物語」との番いを見ると、表山の通り、そのパーセンテージが逆になつてゐる。「源氏物語」百首のうちその半数に近い四十六首が「風葉集」と重複し、「狭衣物語」百首のうち重複するもの三十九首にすぎない(同

じく、詞書の中に含まれた歌は含まれていない)。

といつたことを総合的に判断すると、「百番歌合」と「後百番歌合」とは、「風葉集」入集歌への重複度が、かなり異なつており、それは「風葉集」編纂の方の問題ではあるが、「十物語」への歌の関心度として興味深い。また「後百番歌合」に限つて考えた場合、

一、例えば「御津浜松」十五首のうち、十一首までが「風葉集」と重複していることを、単なる偶然のことと看過してよいであろうか。「参河^岡佐介留」「取替波也」その他ほとんどの作品が、その半数また半数以上の歌を「風葉集」に入れられている。一、「後百番歌合」八十三番右のように、「冷泉院かくれさせ給ひてのころ、一品の宮の御とぶらひに」という詞書は、「風葉集」入集の場合も詞書「冷泉院かくれさせ給へりけるに一品の宮に聞こえ侍りける」と、類似しており、八十四番右の詞書また「風葉集」のそれと酷似している。

といつた事實は見のがせない。当然ながら「物語」百番歌合」は建久中期ごろ成立したかと思われる藤原定家の撰²であり、「風葉集」は文永八年、姞子の命に成るもので、両者の成立年代の前後ははつきりしているが、ここで敢えて推測を加えてみるに、「風葉集」編纂に當つて、その任に當る者(最初に、二百を

〔表Ⅱ〕

	「後百番」の組み合わせ		番数	「風葉」入集歌との重複	
	左	右		左	右
1	源氏	夜寝覚	20	5	9
2	〃	御津浜松	15	4	11
3	〃	参河爾佐介出	15	5	9
4	〃	朝倉	13	3	6
5	〃	左毛右毛袖湿	10	6	5
6	〃	八つ高友	10	5	5
7	〃	取替波也	6	2	4
8	〃	露之宿	5	1	2
9	〃	末葉露	3	1	2
10	〃	海人苺藻	3	0	2
計			100	32	55

注) 詞書の中に含まれた歌で重複するケースは含まれていない。

〔表Ⅲ〕

「百番歌合」の組み合わせ		番数	「風葉」入集歌との重複	
左	右		左	右
源氏	狭衣	100	46	39

注) 詞書の中に含まれた歌で重複するケースは含まれていない。

越える物語から歌を選出する大宮院サロンの女房か、はたまた精撰作業の時点を指すか)が、「物語二百番歌合」、特に十物語に対する定家の選歌態度を参考にしたのではないか——ということである。樋口氏は、「風葉集」の精撰が藤原為家の手で行われ、大宮院の女房の爲子や阿仏尼の協力を得て行われたと推測しておられるが、ならば一層のこと表IIの結果から「物語二百番歌合」のうち、特に「後百番歌合」十物語に対する定家の選歌態度が、大きく「風葉集」に影響を及ぼしているように思われるのである(もつとも「二百番歌合」の中の「源氏物語」「狭衣物語」入集歌が、「風葉集」に及ぼす影響度も考えられようが)。ただ前述したように、表II・IIIともに、詞書の中に含まれた歌の重複は含まれていない。いま「物語二百番歌合」計四百首の詞書の付け方を、逐一「風葉集」重複歌の場合と比較検討してはおらず、その詳細なる分析は次の機会に譲るとして、ともあれ纏々述べて来たった経過から、「風葉集」入集歌を選ぶに当って、特に「夜の寝覚」以下十物語に対する定家の選歌態度が大きく影響を与えたのはなからうか、と一応の推測を記しておきたい。

注(1) 小木喬氏「散逸物語の研究—平安・鎌倉時代編」(昭和四十八年二月、笠間書院)。同氏引用本文はすべて本書に拠る。

(2) 松尾聡氏「平安時代物語の研究」(昭和三十年六月、東宝

書房)。

(3) 樋口芳麻呂氏「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(昭和五十七年二月、ひたく書房)。

(4) 注(3)。

なお本稿の上は、「語文(大阪大学)」第四十八輯(昭和六十二年三月刊)に掲載した。併せお読み願ければ幸甚である。